

## ワークショップ「肝細胞癌境界病変の診断と治療」

司会：中島 収 先生（久留米大学病院臨床検査部）

村上 卓道 先生（神戸大学大学院医学研究科放射線診断学分野）

### 【司会の言葉】

肝細胞癌（肝癌）は多段階的な発癌や悪性度の亢進が特徴的な腫瘍である。病理学的には前がん病変の異型結節（dysplastic nodule:DN）の high grade DN が肝癌の狭義の境界病変に相当するが、その他にも肝細胞腺腫（HCA）の 10-20%を占める  $\beta$ -catenin activated subtype（ $\beta$ -HCA）は癌化のリスクが比較的高い亜型である。また慢性肝疾患を背景に伴う FNH-like nodule の中には SAA や CRP が陽性的なものも含まれ、これらは癌化のリスクが指摘されている。High grade DN,  $\beta$ -HCA, FNH-like nodule などは US, Dynamic CT, EOB-MRI などの画像診断で時として鑑別困難であり、生検診断を含めて診断のピットホールになる可能性もあり広義の肝癌境界病変となりうる。また各々の治療法の選択については各施設間で対応が異なることも予想される。

本ワークショップでは広義の肝癌境界病変も含め、その診断と治療について多くの演題を応募し、活発な討議を期待する。